九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

岡松甕谷のこと

町田，三郎
九州大学

https://doi.org/10.15017/18101

出版情報：中国哲学論集. 13, pp.41-57, 1987-10-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

岡松甕谷のこと

町田三郎

一

甕谷岡松辰の名を知る人はいまや少ない。幕末から明治中期にかけて、かれは帆足一門を代表する俊才として、また木下韓村門下の「三才子」として聞こえ、あるいは東都に文才を謳われ時に反骨の老荘の徒、東洋倫理の鼓吹者教育者として知られていた。つねに時代の一面を代表する存在でもあった。ただその生涯を通観すれば、幕末維新の変革期に人より早く開明されたかれの魂は、かえって庸俗の足の遅さと時代に迎合する精神の低俗さに、我慢がならなかった。そのゆえにことごとに時代と喰い違うことが多かった。従って数少い同志と孤独の道を歩まざるをえなかった。ここにかれの誇りも不幸もあった。こうして甕谷の名はしばらくは奇骨の人として人々の耳目に止まったが、やがて世間はこの不遇な才子をすっかり忘れてしまった。

甕谷の年譜行状に関しては、参太郎・匡四郎の二人の子息が比較的精しいものを残している(1)。これによりながらそのおおよそのところを次に摘録しておこう。（（　）内は筆者の挿入）

文政三（一八二〇）年　正月十四日、豊後国大分郡高田郷に生まる。名は辰、字は君盈、号は甕谷。姓岡松氏。世々高田に住む。高田は熊本藩の属邑。高祖の勝、宝暦享和の際、識抜されて高田郷長となる。子孫その職をつぐ。父名は眞友、数右衛門と称す。母奈須氏。

天保七（一八三六）年　十七歳　始めて帆足万里の門に入る。この年父佐賀関郷長に転ず。（これより以前熊本藩校に入学を志すも許されず）

天保九（一八三八）年　十九歳　四月母歿、十二月父歿。

弘化四	（一八四七）年	二十八歳	夏帆足先生に従い京師に游ぶ。冬更に江戸に游ぶ。
嘉永四	（一八五一）年	三十二歳	秋帆足先生罹疾、十二月西崦より日出に遷る。
嘉永五	（一八五二）年	三十三歳	六月帆足先生歿。冬国学生員に補せらる。
安政元	（一八五四）年	三十五歳	經筵侍講となる。
安政二	（一八五五）年	三十六歳	獄曹椽となり、ついで詮曹に遷る。
安政三	（一八五六）年	三十七歳	江戸に祇役す。羽倉簡堂・安井息軒諸儒と交わる。
安政四	（一八五七）年	三十八歳	江戸より歸り、北野氏を娶る（木下韡村の姪）。
文久三	（一八六三）年	四十四歳	家を熊本壺井川のほとりに購う。竹寒沙碧書屋と称す。
慶応三	（一八六七）年	四十八歳	致仕。
明治二	（一八六九）年	五十歳	大学少博士となる。頼支峰・川田甕江・芳野金陵・重野成斎らと交遊す。
明治三	（一八七〇）年	五十一歳	大学少博士を罷む。更めて太政官権少史に任ぜらるるも固辞して就かず。高田に還る。
明治四	（一八七一）年	五十二歳	延岡に遊ぶ。参太郎生る。
明治六	（一八七三）年	五十四歳	延岡より熊本にもどり、復び竹寒沙碧の旧荘に入る。
明治九	（一八七六）年	五十七歳	居を東京に移す。匡四郎生る。紹成書院を創設す。
明治十	（一八七七）年	五十八歳	西南の役起り、竹寒沙碧荘燒失。
明治十五	（一八八二）年	六十三歳	文部省御用掛り兼東京大学文学部教授となる。九月東京大学予備門教授を兼ぬ。
明治十七	（一八八四）年	六十五歳	東京大学御用掛りに転ず。
明治十八	（一八八五）年	六十六歳	東京大学予備門教授を罷む。
明治十九	（一八八六）年	六十七歳	東京大学御用掛り並びに東京大学文学部教授を罷む。
明治二十二	（一八八九）年	七十歳	東京学士会員となる。
明治二十七	（一八九四）年	七十五歳	華族女学校講師となる。

明治二十八年（一八五九）年　七十六歳　二月十八日、築地にて歿。

この年譜を補うものに甕谷七十二歳明治二十四年の「自寿序」があり、自ら生涯をこうふり返っている。

（余）年十四五、学業に従事し、朝に鑿し夕に塩、矻々として夜以て日に継ぐ。

中歳褐を肥藩に釋る。職は吏曹に在り。常に簿領の間に汨没し、或いは四方に奉使し、道塗往来、遑々乎として未だ以て己れに適することあらざるなり。

王室中興するに及び、嘗て一たび大学少博士を承乏す。居ること歳余、遽にして罷黜を賜う。余乃ち意を進取に絶ち、西歸するに比び、陋巷に屏居して教授自ら給す。頃くして又以て意を県有司に失し、遂に復た家を携えて都に入る。

属たま法制を革釐し、政を敷き治を為す所以のもの、率ね則を欧羅巴に取る。六經四子、之を高閣に束ね、後生の小子に至りては或はその名を挙ぐること能わず。蓋し余の少きとき、亦た嘗て西人の言を修め、その藩に遊ぶを得たり。天下を挙げて駸々乎として且に華を棄て夷に之かんとするを見るに方りて、薪を抱きて以て焚燒の勢いを助くるに忍びず、遂に口を絶ちて復た日月五星の運、風雨気水の説を道わず。以て踽々に至り、世の搢紳先生と背馳す。是れにより交遊鮮少にして家道益々屈せり……。（原漢文）

「伝記」としては、『高田村志』『帆足万里先生門下小伝』及び『甕谷遺稿』巻尾にある関口隆正の「文靖先生行状」などがある。中でも簡要なものは『帆足万里先生門下小伝』であり、そこではおおかた以上のことを解り易く次のようにまとめている。

大分郡高田村の人。同村里正岡松宰助の第二子。初め熊本藩時習館に学ばんとしたが、許されず、天保六年、十六歳の時帆足万里の門に学んだ（2）。刻苦精励長年にわたって学んだ。二十八歳の時、万里に従って京都に従学したが、万里が歸郷するに当り、江戸に至り安井息軒らに交わった。のち万里が西崦に入るや再びその門に至り同塾門生の監督教授を援けた。万里歿後、熊本時習館寮生となった。この時すでに同館教授を圧する意気があった。

安政元年熊本藩侍講となり、中小姓に列し、同年江戸に扈従した。慶応三年致仕し、ついで東京昌平校教授に任ぜ

られた。明治四年延岡藩に聘せられて学政に当ったが、同六年辞去して再び熊本に帰り教授した。明治九年旧友らの招きによって上京し、東京に紹成書院を創めて教授した。ついで東大教授に任ぜられ、同二十二年には東京学士会員に推された。

明治二十八年二月十八日、築地に歿。年七十六。諡名文靖先生という。

名は辰字は君盈、通称辰五。著わすところ紹成講義、漢訳常山紀談、詩文集甕谷遺稿八巻等がある(3)。

二

明治の初年、時人は甕谷の文才を川田甕江と併称して「東都二甕」と称していた。それほどに甕谷の文章力は卓抜であった。かれの文章力は若い頃から群を抜いていたようである。帆足万里に入門した翌年、万里は「井樓纂聞」を脱稿する。これを弟子たちに命じて漢文に書き改めさせた。提出された甕谷の文章をみて「師友皆称其所造詣不可測云」(4)といったという。資質の良さを見抜いてのことばであろう。そしてこの天稟のうえに朝整夕塩のたまゆぬ努力が、いっそう文章に光を与えたのである。

甕谷の詩文を集めたものに『岡松甕谷先生文集』四巻と『甕谷遺稿』八巻とがある。前者は甕谷の季弟魯、号は錬甫、及び友人の奥並継らの編輯によるもので、明治の中期に日月星辰の四巻で刊行された。ここには欄外に羽倉蓬翁・安井息軒・重野成斎らの評語が書きこまれていた。この書は今日大分県日出町の、万里図書館に星辰の下巻一冊だけが写本で残っていい、日月巻は失われている。後者はこれから二十数年後の明治三十九年、参太郎・匡四郎の両名によって輯佚増補されて刊行されたもので、前者に草木山川の四集を加えて八巻とされている。そして前者に存した師友の評語は、甕谷その人も好むところではなかったとして、すべて削除されている。内容は、一二巻が序・記。三四巻が論・説・書・題跋等。五六巻が碑銘・雑著。七八巻が詩。附録として「文靖先生行状」と「甕谷先生墓志」がある。

さて、詩文に関して甕谷自らは「予於詩尤拙」(遺稿凡例)といって、いわば詩は不得手で文章こそ得意とするところであった。一般的に幕末から明治初期にかけては、明朝の侯方域、魏禧・汪琬三家の文章が歓迎された。それは一

種の悲壮の気と奔放な才気との入り混ったもので、それが幕末の書生たちの気風と一致してもてはやされたのである。同時にそれ以前からの唐宋八家を手本とする底流は確固として存在したが、そのスタイルの如何を問わず議論が文の中心となる傾向が強かった。この点を重野成斎はこう述べている。

余弱冠左右と茗讌に入り、諸子に従いて作文を学ぶ。時属に幕府末造、天下故多し。諸子も亦皆年少氣鋭にして相競いて放言高論し、戛戛乎として当世の務めを論ず。故にその作る所は序記碑誌と雖も、一に議論を以て之を作る。初めより体格何如を問わず。老生宿儒、間或いはその侯度を指示す。輒ち倦怠思睡し、蘇陳の論策に非ざれば机上に置かず。以て謂えらく、文は気を以て主と為す、何んぞ体に拘わらんやと。（「文体明辯纂要序」）

こうした気風が明治初期にまで及んでいた。いわば悲憤慷慨し、議論に昂揚する体の文章が流行していたわけである。その中にあってはむしろ甕谷の文章は異色であり特徴的であった。淡々とした描写に終始するのである。この点をかれは「記実法」という云い方で説明している。いうところの「記実法」とは、たとえば「余都に入りてより諸生の業を受くるを請う者あらば、必ず先ず授くるに記実の法を以てす。文簡（万里）先生の遺教に従えるなり」（漢訳常山紀談序）といい、この法を聞き知った中江子篤（兆民）は大喜びし「子の法に循えば、東西言語同じからずと雖も未だ寫すに漢文を以てすべからざるものあらざるなり」（同上）といって二三子と謀って常山紀談の下訳にとりかかったという。つまり甕谷の「漢訳常山紀談」は、「記実法」によるところの漢訳そのものでもあったわけである。そこで「常山紀談」中古来有名な太田道潅の一節の漢訳を参考までに掲げておこう。

太田持資者、上杉宣政長臣也、嘗出郊放鷹、會天雨、過民家乞借蓑衣、有少女子守舎、黙然起折棣花一枝以進、持資曰、非求花也、怒而去、或謂持資曰、古歌詠棣蓑花有言曰、奈實之無有一、和言實之與蓑衣通、女子蓋訴家貧不能蔵有蓑衣也、持資聞之、驚且愧、自是益覃思和歌（5）（巻一）

また「帆足文集序」にいう。「帆足先生嘗て戯れに曰わく、和人の詩文を作るや譬えば獼猴の劇を演ずるが如く、終に眞に似ず。然れども弟子を教うるに文を以て首となすは何ぞや。蓋し後進の文を学ばざれば能く古經に通ずるなきを以てなり。」そこで「記実法」を教えたというのである。こうみてくるといわゆる「記実法」というのも、先秦の古典類を正しく読み理解するための文章修業で、特別の修辞や技巧を排除して、ひたすら平易眞率にものごとを直敍

するといったものといえる。この点にもふれ、かつ己れの学問の系統にも説き及んだ好文章に「岡本監輔に与うるの書」がある。書き下し文にして以下に示そう。

（前略）

某は性愚昧なり。惟だ少くして甚だ文章を嗜む。以為えらく文なる者は以て実を記して之を遠きに伝うる所なり。二典三謨より以て左国史漢に至るまで、皆然らざるなし。嘗て竊に唐宋而下の学者を見るに、率ね此に勤むるを知る罔し。徒に妍を競い靡を斗わせ、華言閎辯、以て勝を一世に争う。抑々亦文を学ぶことの未だ至らざる者なり。是に於て常に法を龍門に取り、専ら實を記すことを以て務となす。夫の華言閎辯、以て勝を一世に争う者に至りては、平生より未だ力を専らにするに遑あらず。是を以て時に著作有りと雖も、皆拙陋にして、殊に取る有るに足らず。未だ世の文章を以て名ある者と、道を分かちて馳する能わざるなり。是れ某の文章に於て、世の学士と異なるものなり。

某又嘗て經を講ぜり。然れども既に洛閩を襲うに非ず。夫の明清の諸家より、吾が邦の伊・物諸先生に至るまで、得有り失有るが若きも、適従する所なし。是に於て務めて今古に渉猟し、其の善き者を擇びて之に従う。亦未だ能く一に定まること有らざるなり。是れ某の經芸に於て、世の学士と異なるものなり。（下略）

「記実」を軸に『史記』の文体を目標にして、いたずらな「華言閎辯、以て勝を一世に争う」ものとは距離をおき、宋明の学を採らずに「善き者を択びて従う」学問を持した、という。たしかに時流とは遠いものであった。いわばクールで端正な文章観であり学問観であった。従って時流とは違っていてもそれなりの評価、あるいは支持もまた存したわけで、だからこそ一部から「東都の二甕」の称もうけたのである。

甕谷が自らを形成していく過程には、さまざまな人物との交流があった。若き日の帆足一門での交わり、熊本の木下韡村門下での井上毅、竹添井井とともに「木門の三才子」と謳われた時代、江戸遊学での先輩同僚、たとえば羽倉簡堂、安井息軒、重野成斎、芳野金陵らの錚々たる人物たち。息軒の三計塾における書生たちの議論好きは余りにも有名であった。白熱した議論の中から多くのものを得てきたことであろう。個人的には竹添・井上とは後々まで親交があり、竹添の『桟雲峡雨日記』には甕谷が序を寄せ、『漢訳常山紀談』の刊行には、竹添が兪樾を紹介して序文を

寄稿せしめている。また後日井上家は匡四郎が養嗣子として継いでもいる。

「香逸遺稿序」はもう一つの維新を夢みて破れた米沢藩士雲井龍雄への鎮魂の文章である。甕谷と雲井とのつながりは、安井息軒を介してのものであった。その文にいう。「余と香逸(雲井)と相い識るは明治紀元にあり。是の歳の春、余使を奉じて西都に入る。香逸、飫肥の人甲田生と前後して来り見ゆ。蓋し二人皆安井息軒に学べるなり。而して余素より息軒と游ぶをう。是を以て初めて相い見えしより、皆肝膽を披瀝し繾々として言いて隠すところなし。」つまり同門の誼みで気脈通じて何の憚るところもなかったわけである。この時世上は騒然としていた。いまにも京都と幕府との戦端が切って落されんばかりであった。三人はしばしば深夜まで時事を論じ合った。しかし具体的な現状の打開策は見出せなかった。まもなく甲田は病没し甕谷また西帰した。やがて会津も戦いに敗れ罪に服した。その翌年、甕谷は大学少博士に任ぜられ東京にいた。一夜飄然として香逸が現われた。この時かれは会津に味方した米沢藩の重要人物として謹慎中の身の上であった。夜陰に紛れて訪ねてきたのである。「余乃ち置酒し與に飲す。香逸既に酔い且に去らんとす。余曰わく、子自ら瞻らすに苦しむこと無きか。嚢を倒にして三十許金をえ、曰わく、以て子の用に充てて可なり。香逸欣然として金を攫りて去る。後復た往来、常に昏を以て至り、相い與に劇談し、必ず夜深きに至りて後に去る。此の如きこと屢々なり。」突然かれの来訪が途切れる。風の便りにかれが囚われ下獄したと聞かされる。「余息軒を過ね、曰わく、香逸果して囚に就けり。息軒曰わく、然らんか。顧うに彼も亦た国の為にするのみ。有司自ら之を亮とすること有らば、未だ必ずしも横ままに刑辟に罹らざらん。余曰わく、然らん。又た数日にして遂に死せり。」

罪名は反逆罪であった。しかも明治元年に制せられた「仮律」によって裁かれたものであった。息軒らの希望は空しかった。それから何年もしないいま、刑法が改正され、国事犯政治犯は、たとえ当路者と意見を異にしても死刑とはしないこととなった。もし香逸のことが、いま沙汰されるなら生命を隕すことはなかったろうにと悔やまれてならない、と文は結ばれる。

雲井龍雄、享年二十七歳。明治三年の暮れの刑死であった。草創期の維新政府には、甕谷にせよ息軒にせよ、果敢に行動した雲井はいうまでもなく、だれもが自らのイメージとの相違を実感していた。それはこの期の人物たちが、

それぞれの維新を構想していたからのことで、已むをえないことであった。

三

甕谷の漢詩文を代表すると思われるものに、先に掲げた「與岡本監輔書」があり、また小品ではあるがかれの人生観を率直に示す「徐庶論」がある。しかしここでは中年のかれに人生の喜びを与えた熊本時代のひと時を描いた「竹寒沙碧書荘記」と晩年秘かにわが道と覚悟した信念を述べる「紹成講義序」をとりあげたい。前者は熊本の壺井川のほとりに建てた家についての記事。西南の役に焼盡するが、甕谷の生涯で最も精神的にも経済的にも安定充実した時代をふり返ってのもので、潤いの感じられる好文章である。「紹成講義序」は晩年の老漢学者の信条を率直に吐露したもの。一つの時代を感じさせる一文である。本来は漢文そのままで文字の配置をみるのが良いが、以下では、詩を除いてすべて書き下し文とした。

竹寒沙碧書荘の記

初め余の褐を我が肥に釋くや、仕は微祿は薄く、又毎(つね)に従いて東都に朝す。道塗千里、動(やや)もすれば給らざるを以て虞と為す。居家は則ち茅茨采椽、僅かに取りて風雨を蔽うのみにして猶お且つ屢々これを鬻りて他に遷る。六七歳を経て、率ね定居あるなし。嘗て詩を賦して以て自ら傷みて曰わく

幾回東運復西搬　幾回か東に運り復た西に搬(うつ)く
嘆息孤貧渉世難　嘆息孤貧世を渉ること難し
猶是庭花紅爛在　猶お是れ庭花の紅爛なるあり
明年還欲乞誰看　明年また誰れに乞いて看んとす

蓋し実を記せるなり。

既にして宅を壺水の上(ほとり)にう。廣さ三四畝に過ぎざるも、宅中樹木疏植し、みな蒼翠森蔚たり。西北に水を隔て、脩竹数千竿、その間人家八九戸あり。邐迤して南に転ずれば以て高阜に接(つづ)く。最も冬月観雪に宜しと為す。竹下

浅沙、延袤数十歩、水は瀰々として沙上より過ぐ。夏月兒童の游嬉するところなり。門前は車馬闐咽して日夜絶えざるも、一たび門に入れば則ち窅然として邃く、頗る巖居棲隠の致あり。余甚だ之を楽しみ、遂に名づけて竹寒沙碧書荘という。諸を老杜の詩語に取るなり(6)。初め至れる時、廳堂房牢、みな数筵に過ぎず。之を久しくして稍やく茸きて数十筵をう。因りて賦して曰わく、

微官未得賦歸田　微官未だ歸田を賦するを得ず
且茸茅齋四五椽　且に茅齋を茸くこと四五椽
疊石新修下江路　疊石新たに修む江に下るの路
無由更辨掘頭船　由りて更に辨ずるなし掘頭船

居ること歳餘、囊低稍やく餘すところあるを覚ゆ。因りて人に屬して一小舟を買う。又賦して曰わく、

小園数畝枕潺潺　小園数畝潺潺を枕とし
柳暉松盤映水懸　柳暉松盤水に映じて懸かる
寄跡微官還不悪　跡を微官に寄するもまた悪からず
俸餘得辨掘頭船　俸餘辨ずるをえたり掘頭船

是の時に當り、余獄曹椽に承乏し、日に簿領を抱きて府署に跼蹐たり。意倦きて還らば則ち解衣盤礴、或いは舟に棹さして上下溯游し、林鳥淵魚と水煙縹緲の間に相忘れ、超然として楽しむこと甚し。曰わく、是れ優游歳を卒うるに足れり、と。此の如きこと数歳なり。

たまたま辺彊靖んぜず、幕府之を能く制するなく、遂に請いて政を致し、天下を挙げて王室に復歸す。余屢々使を奉じて京輩に奔走し、復た暇逸を得るなし。天子学を東都に興すに及び、又謬りて博士の選に膺り、家を携えて都に入る。歳を踰えて則ち免ぜらる。遽かに装束して西し、復た家を携えて南のかた延岡に游び、三年にして歸る。是れより先き天子東西諸侯をして居を闕下に入らしめ、州邑みな有司に隷せしむ。国を体め野を經むる所以のもの幡然として一変す。独り林泉景勝のみなお曩時と異なるなし。余因りて榛莽を剗除し、復た旧廬に安んずるをう。曰わく、庶わくは以て我が生を終うるをえん、と。是に於て門を杜し軌を掃き、日に釣魚を以て

事となし、復た人間に求むることなし。

適ま少時文簡先生にともに事えし者、多く東都に聚まり、書を以て交も余に勧めて曰わく、将に相い与に先生の遺教を修め、之を当世に施すに、子独り来りて力を戮すことなきをえんや、と。余書をえて蹶然として曰わく、是れあるかな。若し拒みて従わざれば、吾れ則ち不義なり。遂に復た長崎より海に泛びて東し、数月にして家人も亦た至る。

明年西南の変作る。王師之を我が邑に禦ぎ、予め城に近きの廬舎数万を焚きて以て自ら備う。而して吾が廬も蓋し蕩然として盡きたり。余初め災に罹るを聞きしとき、悵然として自ら懐いを釋つること能わず。既に復た思いて曰わく、燬なるものは人より出ずるものなり。夫の竹寒沙碧の天より出ずるが若きものは、未だ嘗て燬かれざるなり。他日西歸せば、更めて面勢に因りて之を増築せん。且に旧より愈れるものあらば、何ぞ傷むことこれあらん。然りと雖も、余固より数奇なり。未だ能く歸るをえて之を築けるや否やを知らざれば、則ち復た安くんぞ首丘の嘆を免るるを得んや。遂に之が記を為し、時に観て以て自ら慰む。

紹成講義序　明治丙戌（十九年）

近歳西人の学、益ます我れに盛んにして、天文暦数より以て理化諸術に至るまで、通明ならざるはなし。而して先王孝悌彝倫の教え、且に地に墜ちんとす。西学初めて興るに方り、論者以為えらく、人の知を研ぎ材を達すは、学習に資らざるはなし。夫の孝悌彝倫の若きは、天性に原づき、之を思えば斯ち獲られ、初めより学習を須うるなし、と。是に於て少年子弟を督して専ら力を器数の学に致し、而して六經を高閣に束ねしむ。曽ち数歳ならずして民心日に偸く、風俗頽靡し、往昔に遜なきこと能わず。識者これを慨む。夫れ孝悌彝倫の天性に原ずくは、固よりなり。然れども之を鐘鼓に譬うるに、考かず撃たざれば、何を以て聲を為さん。先王の詩書礼楽の設くるは、人心を皷して道に適かしむる所以なり。然らば則ち風を変じ俗を敦くするは、聖教を明らかにするに如くはなし。予因りて魯論を取りて詩書に至り、遞次に訳するに国字を以てし、之を一世に布き、意に委巷婦孺をして亦た覧て之を識るをえ、以て世道人心に裨することあらしめんと欲す。嗚呼、滔々たるものは天下みな是れ

なり。而して予もまた区々たる一書生を以て遺經をその間に唱えんとす。要は手を以て洪流を障むるが如く、笑いを大方に免れずと雖も、抑も亦た已むより賢れるもの有るなり。

四

晩年、いまや伝説的ですらある貧困に悩まされ、社会的にも必ずしも意に満ちた生活であったとはいえない甕谷の心を支えたものは、『荘子』と『楚辞』とであった。この二書を愛読しながら思うところを注記していったものが『荘子考』五巻『楚辞考』四巻である。明治四十年・四十三年に至って、参太郎と匡四郎は、従来写本によって伝えられてきた二書を刊行するが、『荘子考』の序言に「弁言四則」としてこう述べている。

一　先考は夙に深く時事を慨み、年耳順に乗り喜んで荘子及び楚辞を読み、以て懐いを遣る。遂に二著を著わす。古稀を過ぐる比屢々疾病に罹るも、尚お筆硯を呼び、枕上稿を改め字を刪り、易簀に至るまで手に巻を釈かず。不肖等竊かに以為えらく、二考は乃ち先考心血の傾注するところなり、と。先考嘗て曰わく、我が邦漢学の衰廃、今日より甚しきはなし。経史子集、之を高閣に束ね、復た顧みる者なし。余将に二考を携え、禹域に賦して游び、碩学鴻儒を歴訪して以て相い商榷せん、と。子弟その老羸なるを以てこれを諫止す。居ること一年許り二考架に在るも先考則ち館を捐てたり。

一　先考嘗て不肖等に謂いて曰わく、荘子外篇、前修みな後人の譌撰と攙入とあるを論ず。但だ譌撰の文もなお取るべきものあり、又収むるに足らざるものあり。荘子考は外篇知北遊を以て終う。蓋しそれ以下を以て収むるに足らずと為して之を舎けばなり。故に今敢て補なわず。（下畧）（原漢文）

要するに以上では、甕谷が死の直前まで手を入れつづけた述作が、『荘子考』『楚辞考』の二考でまさに「心血を傾注した」作品であり、かれ自身中国の学者と討論したかったほどに自信のあった著述であることと、この『荘子考』は、『荘子』三十三篇が大きく内外雑の三部に分れているその雑篇庚桑楚篇以下天下篇に至る十一篇を後学の譌撰として切り捨てて、「内外」二十二篇をみるべき『荘子』として考察の対象とした、ということである。

まず「雑」篇以下の切り捨てであるが、古く雑篇の讓王・盗跖・説剣・漁父の四篇は、宋の蘇東坡が浅陋道に入らずと評して以来、たとえば「讓王以下四篇、古今学者、多以為偽作」（王先謙集解）もので、そこでこの四篇を除いた二十九篇本『荘子』の刊行も現に行われている。しかし「雑」篇の全てを切り捨てるのは甕谷の大胆な意見で『荘子考』にはじめてみるものである。そしてこれにも伏線はあって、『荘子考』の内篇から外篇へと読み進めていくと、弁言にもあったように外篇には譌撰でも「可取者」と「不足収者」とが混在していい、甕谷は「不足収者」と考える章を「　」で括って示している。外篇も後半になるとしだいに「　」が多くなっている。いわば「雑」篇は、すべてが「　」に括られるものというわけである。

さて、甕谷が『荘子』を好んだとして、それではいかなる立場から『荘子』を読みとろうとしたのであろうか。多くの先行する書とひとしく『荘子考』も、先人の注解を援用しながら自己の見解をも示し、あわせて『荘子』を評隲しようとする。例を挙げておこう。逍遙遊篇の「堯治天下之民、平海内之政、往見四子藐姑射之山汾水之陽、窅然喪其天下焉」に注していう。

林氏曰、四子既無名、此正荘子滑稽處、如今人所謂断頭話、考曰、窅窈通、窅然猶欿然、喪者失也、失其所有天下、猶易所謂喪匕鬯、謂堯一見四子、驚其至高、至於失天下、亦与宋人失章甫之貨於越無異、其以堯与宋人並挙、所以抑堯也、汾水左伝所謂汾澮、在堯故都、此亦以汾水与藐姑射並挙、一虚一実、其弄筆滑稽亦如此、

およそこのような形式で『荘子考』は書きつがれているのであるが、この書で最も多く先人の注釈を引くものは、右の文にも見えるように南宋の林希逸の『荘子口義』である。林希逸の注解は平易なためかわが江戸時代には広く読まれたものであるが、その立場は、儒佛の思想を交えながら『荘子』を理解しようとするものである。純粋な『荘子』理解とはいい難いが、たとえば蘇東坡が『荘子』を孔子を助ける者と評したように、儒佛道を究極において一つとみるもので、これは明の焦竑の『荘子翼』、沈一貫の『荘子通』と続くひとつの立場ではあった。甕谷もこうした流れに位置する。甕谷が元来「経世」を第一とする儒生であったことを思うとき、この立場も首肯できるようである。

甕谷は、荘周その人の作品は内篇だという。「蒙叟の書、内篇にありては後人の竄掇するところのもの独だ逍遙遊の恵子吾有大樹章及び人間世匠石之斉章、楚の狂接輿歌鳳兮章なるのみ。餘はみな完璧たり…」（駢拇篇）と。

それではこの内篇で何を荘周は説こうというのであろうか。斉物論篇の冒頭にいう。

考に曰わく、物はなお事なり。周季儒墨諸家興る。みな我れを是とし彼を非として爭辯已まず。荘生因りて論駁して之を解辨し、人をして是非得失の甚だしくは相い遠からざるを知らしむ。故に名づけて斉物の論と曰う。物論の斉しからざるを斉しくするに非ざるなり。逍遙遊は人の宜しく稟才の大小に隨い、自処に安んずべきを論ず。而れども是非得失の甚だしくは相い遠からざるを審らかにするに非ざれば、未だ自処に安んずること能わざるものあり。此れ斉物の逍遙遊を継ぐゆえんなり……。

こう注記する甕谷の『荘子』理解は、要は万物は相対的であって俄かに是非を決め難いものであることを知ったうえで、自らの分際に安住すべきだ、というにある。これが古来からの逍遙遊・斉物二篇の精神、つまり荘周の基本思想だというのである。そしてこうした分に安んじて人生の楽地を求めることの最たる造形が夢為胡蝶章である。

人間世篇は「士君子の世に接するの道を論ず。隠居高踏する者と自ら異る」もので、長文の第一章の「顔渕と夫子との問答、累々として数千言に至る。而れどもその歸は物に隨いて順応し、心をその間に容るるなきにあり。能く此くの如くんば暴人と游ぶと雖も以て禍を速くことなかるべく、而して又た能く是れに由りて以て施設するところあらん。是れ荘生処世の第一方にして、蓋し最も得意の処なり」と結ぶ。隠居出世間者の言ではないというのである。とりわけ葉公子高章には共鳴する。「言うこころは奉使者は宜しくその君の命ずる所を伝え、宜しく意を用って作意するところあり、その事を善くせんと欲することあるべからず。伝言の間、稍しく増飾するところあれば敗を取るより免れず。余此の一段を誦する毎に、意甚だ荘生の事を慮るに熟して、以て監戒を為すに足るに服するなり。」己れのかって東西に奉使して奔走した経歴と重ね合せての述懐であり賛同である。

だからといって荘周の言説のすべてに賛成なのではない。きびしく聖賢の心に背馳すると批判する部分もある。応帝王篇の鄭の神巫季咸と列子の師壺子とのやりとりを述べた一段である。甕谷は全篇を総括しながらいう。「応帝王の篇にして、神巫壺子を相するを載す。疑うらくは篇に名づくるの意と相い称わざるものの若し。蓋し荘生帝王天下を御するの道を論じて、その要は虚澹にして物を待ち、務めてその心を拂擾するなくして、その術深く自ら秘閉するを貴んで天下の衆をして我れを窺見するを得しむることなし。故に篇首の数節みな虚澹にして物を待つの説を述べ、

肩吾狂接輿に見ゆるに至りて微しく痕跡を露わすべからざるを言う。既に又た老子の言を引きて曰わく、不測に立ちて無有に遊ぶ、と。その下遂に神巫の一説を挙げて以て之が證となす。その意蓋し以為えるなり、帝王の不測に立ちて無有に遊び、天下の衆をして我れを窺見するを得るなからしむるは、亦たなお壺子の神巫に於けるがごとし。夫れ恬澹虚無を心と為さば、天下を挙げてまた意に介するに足るものなし。此れ僧家の趙州斬猫に取るある所以なり。然れどもそれ終に惨覈少恩の人たるを免れず。而して深く自ら秘閉し、人をして窺するをはばからしめば、亦た所謂るその弊や賊なるものなり。太史公以為えらく、申韓刑名の学、道徳に原づく、と。彼のその会心の處、蓋し此に在るなり。嗚呼、荘生の術、逆に陰賊の歸となりて、罪を名教に獲るや、良に以あるなり。」

道家思想の一面として存在する非人情が、申韓刑名の徒の酷薄に通ずるとする指摘は、現実の政治に関わりつづけてきたものの言として、正しい。甕谷の儒生として経歴した半生が見えるようである。

五

山路愛山に「荘子論」の一文があり、その副題には「岡松甕谷先生の荘子考を読む」とある(7)。明治四十年の春、梅の花咲く頃この書を読んだという。愛山ははじめに古典研究者のタイプとして注解家と批評家とがあるとし、漢学の分野では批評家といえるのは仁斎と徂徠で、「甕谷先生も私の見る所では先づは注釈家であります。殊に荘子考の書は大体から言へば先生の読まれた書籍、先輩から聞かれた解釈などを其儘集め、時々、先生自身の発明も加へられたもので言はば集注のやうなものでありまして其有益な部分は注解に在って批評には在りません(8)。」そこで愛山はこうした基礎学としての注解家の業績を基本としながらも一歩を進めて批評家の事業に及び諸子学の眞相を発揮したいと希望して「荘子論」を書いた。要は荘子の思想の特徴を非政治的な内面の徳の絶対化とその具象としての至人・眞人は、天地と共にありつつも同時に天地万物を支配する内聖外王論へと展開する、というこの二つとみる。こうして荘子の大体を紹介しながら再び甕谷にもどって、『荘子考』に注釈としての価値を認めながらも、「甕谷先生が荘子其ものの議論の大体を捉むに就て些さか明白でなかったことを憾みとします。それは先生は荘子の議論をなさるるに、

やはり之を処世の教訓、道徳の格言と云ふやうに見て居られたことであります。荘子の言が自分の思想と合へば、之を賛すると云ふやうな態度を取られて、老荘学其ものを有形のまゝ紹介すると云ふことに就て先生の工夫はやや闕如たるものがあったやうに思ひます(9)。」

愛山は、甕谷の『荘子考』に触発されて自らの「荘子論」を展開するのであるが、その中で甕谷の基本的な注解家としての姿勢や余りにも自らにひきつけて『荘子』を読むことの限界性を、的確に衝いている。その点は正しい。しかし『荘子考』を、これが書かれた明治初中期にもどして考えるならば、この書はもっと評価されてよい。それは第一にきわめてわかり易い注釋書となっていること、第二に「雑篇」以下を切り離すという独特の見識に立つこと、そして第三に「まま発明する」ところがあるといわれるが、実はたとえば応帝王篇における道家の虚無恬淡の論理と法家思想との共通性の指摘といった鋭い見解が早くも見出せることである。改めて評価されて然るべきだと思われる。

『楚辞考』四巻も特色のある書物である。明治四十三年、『荘子考』と同様、二人の子息の手によって刊行された。単行の外に大正五年富山房刊の「漢文大系」二十二巻『楚辞』に「考曰」の部分が抽出されて、王逸・朱子の両注とともに収載されている。『楚辞考』について竹治貞夫はこう述べている。

本書は王注・朱注の要説を交え取り、まま洪興祖補注、林雲銘の説を引き、「考曰」で自らの見解を示しているが、旧注の不足を補い、その是ならざるものを正すことに主眼を置いて、注解の煩絮に陥るのを避けている。行文簡潔にして所説穏健というのが、本書の特色である(10)。

ただ『楚辞考』に採録された作品は、林雲銘の『楚辞燈』に取られている二七篇と宋玉の「九辯」および淮南小山の「招隠士」とである。つまり『楚辞』の作品の見るべきものは、屈原賦及びこの二篇に盡きるとするからである。しかもこの書の最も特色ある主張は、屈原投水説の否定である。その論拠は、懐沙篇が絶命の辞ではないこと、屈原の賢にして自殺することはありえないこと、及び他篇の詞句からもその水死は否定しうること等々とする。甕谷以前にも自殺の否定論は存したのであるが、たとえばその主張の中で賢人が自殺するはずがないとするのなど、余りに主観に過ぎたもので、到底これによって『史記』屈原伝の従来の記事を否定し去ることはできない。客観的な妥当性をもたないからである。

たしかに客観性を欠き、一面ではいかにも甕谷らしい信念から発したものであるが、こうした弱点をもった主張を内に含んだ『楚辞考』ではあるが、この書がわが邦の学者による本格的な楚辞注釈書としての唯一最初のもので、なおかつ採るべき見解も必ずしも乏しいものではないこと、だからこそ「漢文大系」にも抽出されたものであることを思うとき、本書もまた『荘子考』とともに甕谷の忘るべからざる業績であることを知らねばならない。

『高田村志』にいう。

晩年甕谷の肺を患ひて病勢漸く加ふるや、一日細川十洲来訪し、梅花数枝を贈りしに、甕谷大いに悦び、床上に仰臥せしまま吟じて曰わく、

詞朋贈我一瓶春　詞朋我れに贈る一瓶の春
数朶瓊英映壁新　数朶の瓊英壁に映じて新たなり
自咲衰残瀕死日　自ら咲う衰残瀕死の日
得為溪上看梅人　溪上看梅人たるを得たるを

時に十洲、瀕死の二字は何れか改むべしといひしに、甕谷は、是れ寫実なりと答へて改めざりしといふ。明治二十八年二月十八日、七十六歳にて築地僑居に歿す。越て三日青山墓域に葬り、私謚して文靖先生といふ(11)。

〔註〕

(1) 「文靖先生年譜」として「甕谷遺稿」の冒頭に附されている。すべて漢文である。
(2) 右の年譜によれば、この年「秋遊于日出」とはあるものの、この年の入門とはいっていない。
(3) 大塚富吉『帆足万里先生門下小伝』昭和四十六年、日出町教育委員会
(4) 関口隆正「文靖先生行状」（「甕谷遺稿附録」）による。
(5) 原文はこれに一二点がついている。なお「漢訳常山紀談」は、息参太郎の緒言によれば、第一巻〜第三巻までは定稿本と

して保持されていたが、その他の七巻が失われていた。この部分を中江兆民から預って徳富蘇峰が所持していた。そこで未定稿でもあったので、父の友人竹添井井に依頼して疑義を正し訓点を施して出版した、という。大正五年の記である。

なお「常山紀談」の原文は左の通り。

太田左衛門大夫持資は上杉宣政の長臣なり、鷹狩に出て雨に遭いある小屋に入て蓑をからんといふにわかき女の何ともいはずして山吹の花一枝折て出したれば花を求るにあらずとて怒りて歸りしに是を聞きし人のそれは「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞかなしき」といふ古歌のこころなるべしといふ。持資おどろきそれより歌に志をよせけり。

(6) 『九家集注杜詩』巻二十五の「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首」のうちの其二に「竹寒沙碧浣花溪」とあるのを出典とする。

(7) 山路愛山選集第三巻所収、昭和三年　万里閣書房

(8) 上掲書四三一頁

(9) 上掲書四六四頁

(10) 竹治貞夫『楚辞研究』三五〇頁　風間書房

(11) 『高田村志』一七四頁。大正九年刊

（本稿は昭和六十一・二年度文部省科学研究費による研究成果の一部である）